

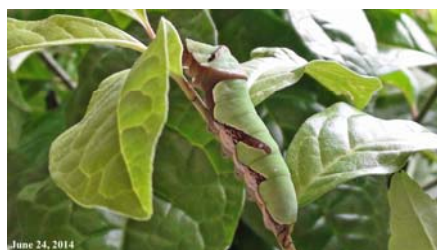
オナガアゲハは北海道から九州まで広く分布するが、本州の中部より南では山地性のチョウとなって、その気になって山へと入らないと簡単には出会えない。筆者が初めて本種と出会ったのは高知県大豊村梶が森に遠征した夏のことだったと思うが、確かな記録としては、すでにアルバム標本とした Aug. 23, 1970 兵庫六甲山、というラベルのつく筆者採集の♀があり、次いで May 3, 1971：高知吾北村清水；coll. Biwako Simazaki のラベルがつく、僻地教育に情熱を傾けた亡き父に同行した地で亡き母が採集した♂のアルバム標本が残っている。右の記録に見るように、おおむね♀の方が大きい。

クロアゲハ、カラスアゲハなどのクロ系アゲハの多くがツツジなどの花蜜を好んで訪れるが、本種は溪流沿いを流れるように、あるいは木陰の多い林縁を縫うように飛びぬけていく光景がよく似合う。そんなわけで、本種の撮影記録が長い間撮れなくて、そのせいもあって出会い記録の執筆を躊躇してきたが、



ついに、May 19, 2014 にツツジの花を訪れた♀のビデオ撮影記録が撮れた。撮影地は、幼虫が好むとされるコクサギが溪流沿いに豊富にある兵庫県夢前町山之内というところ。チョウが花を訪れているとき、ゆっくり蜜を吸い続けてくれると撮影が楽なわけで、今回は花蜜が美味しかったのか十分時間をかけてとどまってくれた。この日、このツツジを訪れた他のチョウは、クロアゲハ、カラスアゲハ、ミヤマカラスアゲハ、アオスジアゲハで、少し離れた場所ではモンキアゲハも観察でき、アゲハ類の観察にもってこいの好ポイントに出会えた思い。

2014 年に体験した本種の幼虫がコクサギを好むことを実感できたエピソードを紹介すると、ミヤマカラスアゲハの飼育目的で野外から採取したコクサギに、偶然卵がついていたようで、ある日突然幼虫が姿を見せるというラッキーな展開があり、日本産アゲハ属中もっとも細長いとい



う蛹も目の当たりにできた。なお、終令幼虫はクロアゲハとよく似ているが、おどろいたときに出す嗅角が本種は淡黄色でクロアゲハは赤いという明瞭な区別点がある。

May 5, 2016 クリンソウが咲く山間部で

最後に竹内さんが案内してくれた、クリンソウ（九輪草）が咲く山間部で、オナガアゲハ、カラスアゲハの吸蜜シーンをフォロー。カラスアゲハは一度吸蜜をして、高い位置の杉の葉上で休



息を始め、もう寝てしまうのかとあきらめたのだが、帰ろうかと車にもどりかけたタイミングで再び蜜を吸いに降りてきてくれて感激。

May 22, 2020 タニウツギが咲く溪谷へ

最近、この時期に黒系アゲハに会うために兵庫県山岳部のタニウツギが咲く溪谷へと遠征している。9時15分発、途中、道の駅に立ち寄ったりして11時10分に到着した現地にミツバウツギの白い花はなく、アオバセセリはいないしウスバシロチョウの姿もない。ミスジチョウらしき飛翔をみるがすぐに見失う。タニウツギが多い溪谷へと歩くと、そこでは大雨のせいか崩落した法面の修復工事のためにタニウツギの樹が半減しているが、クロアゲハ、オナガアゲハ、ミヤマカラスアゲハなど、いずれも♂が時間間隔をあけて訪花する。ベルギーの蝶友が欲しいと言ってきている♀には出会えないまま撤収。

